

「見知らぬものとの出会い」

大村 恵美子

9月11日のニューヨーク事件以来、地上の風景は一変してしまいましたが、来たる12月16日の第90回定期演奏会で、「地には平和」（クリスマス・オラトリオ）第21曲）を歌うべく、私たちが練習を重ねている現在、皆様は日々どのようにお過ごしでしょうか。

アメリカの攻撃準備が整い、テロリストの本拠地と断定された地域への集中的戦闘状態が、始まっているのでしょうか。中東、アフガニスタン、その他の難民や被抑圧集団は、まだ持ちこたえていられるのでしょうか。それとも餓死の大ホロコーストが襲いかかっていないのでしょうか。全アラブの、あるいは全モスレムの憎しみが引き起こされて、全世界がまた二極衝突状態に入りこむのでしょうか。

21世紀最初の年末は、このような、いわば先送りされつづけてきた人類の対決事項が、重なり合って火を吹き、ものすごい嵐に突入する段階を迎えています。まさに、歴史そのものが、「見知らぬものとの出会い」であることを痛感させられる日々です。

じつは、このタイトルは、1951年生まれのオーストラリア国立大学教授、テッサ・モーリス＝スズキの「記憶と記念の強迫に抗して一靖国公式参拝問題によせて」（「世界」2001年10月号）の最終章のタイトルで、そこで筆者は、1918年、第1次世界大戦の終る直前に戦死したイギリスの詩人W. オーウェンの、同名の詩について書いているのです。

この静かな、死の世界を予見する詩が、現在の燥状態にある世の中で、どの反戦スローガンなどよりも有効な覚醒効果をもつものではないかと思えましたので、皆様にご紹介し、まずは12月16日の私たちの演奏会も、支障なく開くことができますよう、ともどもに祈りたいと思います。

「見知らぬものとの出会い」

1915年、イギリスの詩人ウィルフレッド・オーウェンは、あまり気乗りのせぬまま、第1次世

界大戦に従軍を志願、1916年の末にフランスへと送られた。戦場の前線に到着した彼は、短いながら戦争に参加する興奮を味わう。1917年の元旦に書かれた母親への手紙のなかで、オーウェンは「フランスにいるのはすてきに英雄的な気分です」と書くが、それはオーウェンが戦闘について肯定的なことを語った最後のものとなる。それから1年半、彼は悲惨を嘗めつくした。オーウェンが憎悪した塹壕戦の不潔、残酷さ、不毛さと醜さそのもの。とりわけ彼は自分とまわりの人間にそれらの醜悪が及ぼす、人間を人間でなくしてしまう効果を憎んだ。最後に、単純な生存本能が彼の精神を殺し、有能な戦闘機械へと仕立て上げる。1918年10月はじめの母親宛ての手紙で、彼は戦争がいかにか「私の嫌悪の限界を越え、私は自分の人間的な性質をすべて失い、まるで〈天使〉のごとく戦った」か、述べている。1ヵ月後、ウィルフレッド・オーウェンは戦闘で殺される。その死を伝える電報は、第1次世界大戦を終わらせた休戦協定に大国が署名したおよそ1時間後に家に届けられたという。

彼のもっとも有名な詩「見知らぬものとの出会い」は、その死の少し前に書かれたが、そのなかでオーウェンは、自分がとつぜん戦場から運び出され、眠っているように見える人間たちの姿でいっぱい暗い地下のトンネルに着いた夢のような情景を描いている。トンネルを歩いていくと、眠っている者のひとり一見知らぬ他人なのだが、その顔はふしぎに見慣れたものに思える一が、立ち上がって彼に話しかける。その瞬間、彼は自分がどこにいるのか理解するのだ。

「この男の微笑みから、わたしはこの陰気な回廊がどこかわかった—

その死んだような微笑みで、わたしは自分たちが地獄のなかに立っていると知るのだ。」

最初、詩人は悲しい気持ちがない、なぜなら

地獄でさえも自分があとにした戦場ほどひどくはないだろうから。だがこの見知らぬ男が話しかけてくるにつれ、彼はとつぜん失ったものを知って痛切な悲しみに襲われるのだ。戦争で浪費された人生と人間の夢の認識。そして詩の最後の数行で、この見知らぬ人は自分の顔がなぜふしぎに見慣れたものに思えるかを説明する言葉を吐くのだ。

「友よ、わたしは君が殺した敵だよ。
わたしにはこの暗闇でも君が分かる、
なぜなら君は
きのうわたしを突き殺したときと同じ顔をして
いるからね。
わたしも攻撃をかわそうとしたが、わたしの
手が言うことをきかず動かなかつたのさ。さあ
いっしょに眠るとしようか……」

死者を記憶しよう、しかしオーストラリア人には日本人を記憶させ（そしてヴェトナム人を、トルコ人を……）、日本人にはオーストラリア人を、中国人を、朝鮮人を、東南アジアやほかの国の死者を記憶させよう。死んだ人々のことを憶えておこう、しかし死んだ者が持つかけがえのない多様さとともに、それらの人々を記憶しよう。自分が理解もせず信じてもいなかった戦いで死んだ人々。自分の国のために、あるいは自由のために戦っていると信じて死んだ人々。恐怖に襲われ家に帰りたいと思いながら死んだ人々。自分を戦場に送った将軍や政治家たちを憎んで死んだ人々。そして自分が有能な殺し屋になったことで自分自身を憎んで死んだ人々。死者を記憶しよう、でも彼ら彼女らを均一の集団に押し込め、単一の場所で単一の日に単一の自費的「我々」によって記念することはやめよう。

そしてもし、私たちが戦没者の碑や無名戦士の墓を造らなくてはならないのなら、そのすべてにウィルフレッド・オーウェンの言葉だけを刻もう—

「友よ、わたしは君が殺した敵だ……」。

」

＊

ひき続き 2002 年度の演奏計画について

さいわいにも無事に 2002 年を迎えることが出来

たとすれば、新年は、私たちにとって、合唱団創立 40 周年にあたります。記念行事の主要なものは、5 月 12 日の〈ロ短調ミサ曲〉、12 月の〈マニフィカト〉演奏です。10 年前の 1992 年にも、〈ヨハネ受難曲〉と〈ロ短調ミサ曲〉という 2 つの大曲を、1 年のうちに上演したことがありました。創立記念の節目の年には、従来もしばしばこういうことになり、1 年も 2 年も前から、並行的に練習の中に組みこんで、対処してきました。

その場合、合唱団の中で、カンタータがしばらくご無沙汰になるもの足りなさが話されることがありました。私たちの足取りの基軸はカンタータにあり、それが 5 年おきの記念年で、大曲に取り組むことで中断されるのです。まあ、贅沢な言い分ではありません。

恒例の、8 月の野尻湖演奏会を考えると、少ない人数の合唱で大曲からの抜粋の羅列では、盛り上がりならず、毎回あれこれ工夫がされてきました。さいわい、現在は、「カンタータ 50 曲選」の出版が昨年からは実現され、私たちは、よりすぐりのすばらしいカンタータの新しい楽譜を手にしつつあるところです。そこで、私は、2002 年度の野尻湖演奏会には、次回（2002 年 1 月発行予定）の第 3 集の中から、次の 3 曲を選んで上演曲目とし、5 月の〈ロ短調ミサ曲〉公演後に、〈マニフィカト〉と並行して練習を開始しようと考えます。

1. BWV124 〈イエス ともにあらん〉
2. BWV104 〈牧人 主よ きけよ〉
3. BWV150 〈なれを 主よ われは仰ぐ〉

そしてさらに、将来的な希望として、8 月の野尻湖演奏会は、受入れ側のご協力が得られる限りつけてゆき、現在、東京バッハ合唱団員が全員で揃えつつある「バッハ・カンタータ 50 曲選」の全曲演奏をめざして努力したいと思います。もちろんオーケストラも独唱者もカットなしの完全演奏が理想ではありますが、それらを完備できない現在の演奏形態（ピアノ伴奏）でも、リゾートのお客様方には大いに歓迎されているのです。TPOにしたがって、バッハを現在に近づけて親しむということも、経済的理由からバッハが手つかずにお蔵入りになるよりも、ずっと意義のあることと考えます。これからは、そういう柔軟思考も必要ではないでしょうか。とにかく、「バッハ 50 曲選」の楽譜とともに、バッハがもっともっと人々の間に浸透し、愛されてゆくこと、これは創立以来のこの合唱団の使命でもあったこと

を思い出します。

記念すべき2002年が、2つの大曲と、多数のコンタータにいろどられた、はなやかな一年となることを、夢んでいます。

15年をバッハ合唱団と共に

大村 恵美子

今年の6月号月報に「(バッハの国から来てバッハの国に帰る)ワルブレヒト一家」として、ご紹介したばかりのワルブレヒト氏ご夫妻とのお別れが、急に早まってしまいました。

12月16日の、私たちの定期演奏会を最後に、日本を離れるというご予定だったのですが、この夏の交渉で、ドレスデン・フィルハーモニーでのお仕事がきまり、12月早々に成城のお家を後にしてドレスデンへと引越されるとのことです。



このご一家との交流ほど、時代を負ったドイツの国情を、私たちが深く体験したことはありませんでした。それは1983年の、合唱団の初めてのドイツ演奏旅行のときから始まり、年ごとに音楽をとおして暖められてきたものでした。

今ここに全体をふり返ってみますと、あまりにも溢れ

るほど多くの回想が流れ

写真①
アイゼナハのバッハ像前での再会

出てきますので、
ただ年表の形で事実

をいくつか列記するだけにとどめておくことにします。

1983年8月

合唱団第1回ドイツ演奏旅行中、ライプツィヒ・トーマス教会での演奏会を、ワルブレヒト家の皆さんが来聴された。かつてライプツィヒ音楽大学で識

り合われたヴィオラ奏者のゲルハルト氏、ピアニストの幸子さんが結婚されて、ナナ(奈々)、フレッド(洋)、ヴィオラ(すみれ)の3人のお子さんと、ケムニッツに住んでいらした。

その後東京に移住され、幸子さんのご両親のお近くの一軒家に落ち着かれて、新日本フィルのメンバーとなられたゲルハルト氏が、

1985年8月

「バッハ5 DAYS イン春日部」という催しに客演したバッハ合唱団と、リハーサルで再会。ここでご一家と、東京での交流が始まる。ゲルハルト氏は、事情のゆるす限り、合唱団の定期演奏会に協演してくださり、小学生のすみれさんがソプラノの一員として入団された(1986年4月～1996年の10年間)。

1987年3月

足利教会献堂記念演奏会に、すみれさんも出演、幸子さんと洋さんも、団員とともに足利までの遠足に同行された。

1988年8月

第2回ドイツ演奏旅行に、すみれさんも参加、ベルリン、ライプツィヒ、アイゼナハと巡演。ワルブレヒト家の故郷アイゼナハ(バッハの家系と同様、牧師、音楽家を多く輩出)で、バッハハウスのバッハ像の前で、待ち合わせたお祖父様との再会(写真①)、ゲオルク教会演奏会にはお祖母様ほかご親戚の方々のご来聴(写真②)、これらの名シーンは、全員の心に永く焼きつけられた。

(このころからライプツィヒなどで市民集会活発化)



1989年8月

野尻湖神山教会での演奏会に、洋さんがチェロで協演、関(現・中島)紅子さんのピアノと印象深いアンサンブルを形づくられた。

(1989年10月 ベルリンの壁崩壊)

その後は、「ばっはめいと」コンサートでの個人演奏などでも、奈々さん、すみれさんがヴァイオリン

助奏を引きうけられ、定期演奏会ではゲルハルト氏のヴィオラに奈々さんのヴァイオリンも加わる。

幸子さんのピアノに弦四重奏という、一家総出のファミリーコンサートが、東京各地で何回も開かれ、やがてお子さん方は次々に、音楽（奈々さん）、神学（洋さん）、比較文化（すみれさん）の勉強のためドイツへと巣立たれながらも、夏やクリスマス・新年には全員が成城のお宅に集って短い休日をすごされては、コンサートも続けられた。

2001年6月

来たる12月の新日本フィル定年退職を惜しむオーストラのお仲間が主催して、品川教会で、ゲルハルト・ワルブレヒト氏にささげる「バッハの夕べ」を開催、成城合唱団とともにバッハ合唱団も加わって、カンタータ106番「神の時」を歌わせていただいた（写真③）。



写真③ 成城学園内にて、成城合唱団との合同練習

急な結末のお知らせを受けて、団員に電話連絡、数日後の10月6日(土)練習後、桜新町のレストラン「ロータスガーデン」で、歓送夕食会が開かれることになりました。

小・中・高校生だったころのお子さん方とは、もう永久に逢えないのと同様、成城のご一家とは二度と逢うことのない淋しさはありますが、まだまだご両親も現役、二世方はこれから開花して、日独の架け橋として活躍を始められるのです。おたがいに大きな夢を描いて、未来に送り出すことにしましょう。

これまでのご親交、ほんとうにありがとうございました。

＊